

様々な資料が挟まれている一冊のファイルから、400字詰め原稿用紙に書いた21ページからなる駄文が出てきた。たしかにこんな文章を書いた記憶がある。  
昭和36年に山歩きを始めた。山歩きを「一生の遊び」と認識し始めた頃に、それまでの自分の足取りを振り返りながら書いたものだと記憶している。昭和39年に都心の牛込から国立に転居し、山歩きに便利な場所に住むことで一層その感を強めた時期でもあった。  
文章の中に出て来る表現からすると、昭和44年(25才)頃に書いたものと思われる。誤字・誤記がある部分の修正だけをして復刻・保存することにした。

私の中の富士山 そして山歩きへの道  
(45年前に書いた駄文)

### 第一章 私は・・・そして富士山

私こと通称・・・、実の名は・・・、まあそんなことはどうでもよいことではないか。  
言うならば、私は戦後の乱世をヤミ米で生き抜いた(というよりも育ててもらったと言うべきか)どこにでも転がっていきそうな一人の男にすぎない。

猫でさえ「吾輩は猫である。名はまだない・・・」と自己紹介してからお話を始めるのだから、少なくともこんな書き出しはしなければならぬだろう。

今を去ること四半世紀前、私はお茶の香りと男意気を唄う静岡県の小さな町に生まれた。何事によらず大言壮語癖のある私は、わが故郷をたたえて言う。

「何しろ風呂の中からもトイレの中からも、四六時中富士山が見られる所さ」  
百人一首の中にある「田子の浦にうち出でてみればしろたへの富士の高嶺に雪はふりつつ」  
田子の浦は我が町の南端、駿河湾に面した美しい海岸だった。だが今はどうだろう。  
新興工業地帯として、スモッグとヘドロと・・・。いやはやがっかりさせるではないか。  
昔の思い出が壊れてしまっただけ・・・と思い、静岡方面へ旅することがあっても一度も田子の浦には立ち寄ったことがない。

田子の浦からの富士は、山梨県の忍野村からの富士と並びその秀麗さは抜群である。子どもの頃の絵日記などを引っ張り出してみると、富士を描いた絵や文が多いのにいまさらのように驚かされる。

晴れた富士、雲のかかった、夕焼けの、初雪の。

小学校の先生がよく言っていた。

「私たちの町からは、日本一の富士山がこんない大きく立派に、しかも毎日見られる。せっかくのこの素晴らしい環境を大事にしなければ勿体ない。写生の材料や作文の題に困ったら、じっくり富士山を眺めて感じたことをありのままに書いてみなさい」

風呂やトイレからの眺めはともかくとして、とにかくお寺の屋根の上にも田圃の畦道にも、湧水の流れにも物干しのおしめにも、何にもじっくりと融け込んで見えるのがこの町の富士山だった。

小学校の五年生の時に我が家は母の実家がある宮城県に転居し、六年生の時に東京に転居した。

東京、おおこの騒々しい町よ、明るい町よ、汚い町よ！

私と私の家族が住みつけた麴町は、皇居が近く旧江戸城の外堀と内堀に挟まれた所だったので、緑は比較的多く鳥も沢山いる、東京の都心では稀に見るまともなところだった。

東京での生活、何よりも物足りなく思ったのは、富士の見えぬ生活。毎朝毎晩仰ぎ見ていた富士に変わって、都会の生活では自動車の音ばかり。

ホームシックならぬフジシックにかかっていたある冬の日、私は驚き興奮した。

旧江戸城外堀の石垣が残る四谷見附跡、石垣によじ登って遥かかなた(神宮外苑の方角)に目をやると、

白い富士が小さく見えるではないか。東京からも富士山が見えるぞ！

「江戸名所図絵」や広重の絵にも富士が多く描かれてはいるものの、この目で確かめた喜びと驚きはひとかたならぬものがあった。

池袋や新宿のデパートの屋上から、テレビ塔の展望台から・・・、冬の晴れた日なら都心からでも富士はいくらでも眺められた。

それから数年後、私は旅好きな男になり、ふとしたことで登山を始めることになった。

そして今、富士の見える山に登ると異常な興奮を感じる山男になった。

という私、またの名を「フジキチ（富士きちがい）」の私は、再び富士を眺めて暮らすことが可能な町、国立（くにたち）という人口五万人足らずのちっぽけな町に移り住んで五年になる。

## 第二章 私の町はこんな町

私が住む町「国立」は、東京から中央線で約一時間。駅を南側に降りると、パリの市街を思わせるような（こういうセリフを「見てきたような嘘」というのかも）放射状に広がるメインストリート。これがこの町の特徴と言える。

東に伸びる道は「朝日が昇る旭通り」、西に伸びる道は「富士山が良く見える富士見通り」、南に伸びる道は「一橋大学の中を通り抜ける大学通り」。

旭通り、何ともありきたりの名前すぎて軽い感じがしてしまうが、空が真っ赤に染まる日の出の瞬間はなかなか素晴らしい。しかし、それにも増して満月が輝くように上り来るさまは一巻の絵巻を見るようだ。武蔵野の特徴である雑木林、その黒々としたシルエットの陰にまんまるの月が姿を現すと、それは夢のような美しさというものだ。

兼好法師曰く「萬のことは、月見るにこそなぐさむるものなれ」。そう、そのとおり。

旭通りをどこまでも進むと目の前に上り坂が立ちはだかる。この坂を上ると国分寺の町になるが、坂の名前がまた何とも訳がありそうな名前であれしくなる。「多摩蘭坂（たまらんざか）」という。

富士見通り、これまたありきたりの名前ですすがの富士山好きも好まない安っぽい名前だが・・・。

その名が示すように、この道の行く手には丹沢の山を前に置いた想外の大きさの富士を見ることができる。冬の朝、ここで富士を見ることで天気予測は殆どつく。真っ白い富士、雲ひとつなければ今日も明日も晴、周りに薄雲なら寒くなるし、富士が見えない時には今日か明日かは曇りのち雨。こんな具合に適当な天気予報のアンチョコが作れる。

大寒の頃、北風が木々を揺する夕暮れ時、夕やけ空に雪煙りをなびかせる富士を見ることがある。

紫に澄みぬる富士はみちか夜の暁起きに見るべかりけり 牧水

この町のこの富士見通りの富士は、牧水の富士と違って「夕暮れ時に見るべかりけり」と言いたいところだ。

大学通り、これはこの町（文教地区という指定がある）に相応しい名前の道だ。一橋大学に道の両側から挟まれ、というよりもむしろ、一橋大学の中を横切っているように南へ向かって真っすぐに走っている。桜並木のこの道は、桜が咲く頃そして花が忘れられた頃に見る小さなサクランボが熟れる頃が素晴らしい。桜並木の歩道をどこまでも歩いてまた戻り、また・・・。

ずっと南へ行くと、大きな団地を通り抜けて次第に道は寂しくなっていく。南武線の踏切を渡り甲州街道を横切ってしばらく行けば、そこには北原白秋が歌に詠んだ多摩川の流れがある。岸辺の田や畑は、高速道路の完成により今は大きく姿を変えつつある。やがては消えて行くことになるだろうが、この町の穀倉地帯らしい。

国立市には文教地区という名が示すように学校が沢山ある。大学が四つ、高校が五つ、中学校が四つ、小学校が八つ、僅か8平方キロの町によくこれだけ学校がそろったものだ。

中でも国立音楽大学と一橋大学は、今から50年ほど前、まだこの町が雑木林に埋もれた「国木田独歩の武蔵野」だったころからの住人らしい。学校が多いせいか、この町には下宿、間借り、居候など様々な暮らしをする学生が数多くいる。

学生の町という印象がはっきりと感じられるのは、やはり日曜日だろう。アパートの窓辺で洗濯物を干す男

子学生、パガニーニの練習曲が流れる垣根、オペラのアリアを口ずさみながら散歩する女学生、吉本隆明だの高橋和巳だのと言いながら議論をし合う喫茶店「邪宗門」。スーパーマーケットへ行って見ると、団地の奥さんに混じってネギや肉を買っている男の子がいる。大学のキャンパスで一人読書に耽る男、この町に何軒かある古本屋の店先で店の若い店主と値切りの交渉をする女の子。こんな次第で、国立という町は新興住宅地特有の何となくお互いに空々しい薨の連なりと、古き良き時代からの学生の町特有の空気とが互いに侵さず巧みに存在し合っている面白い町だ（と私は感じている）。

私がこの町に住みついたのは昭和40年も暮つ方の師走23日。その頃はこの町はまだ「市」になってはいなかった。「東京都北多摩郡国立町」私がこの町を選んだ理由は特別には何もないが、しいて言うならば、「北多摩郡国立町」という呼び名の響きに魅せられたせいもあるかもしれない。東京にも「郡」と呼ばれるような、どことなく味わいのある部分があるんだ、と思っただけでも心躍る感じがした。

ところが、私が住み着いて十日と経たぬ間に「町」は「市」になってしまい、心躍る「北多摩郡」は使えないことになってしまった。だからと言ってそれを理由にこの町を捨てる気は全くない。

と言うのも、この町に住んだ私はこの町から見る富士が思いのほか美しいことを知ったし、それよりも何よりも奥多摩や奥秩父、丹沢の山に近いこと。中央本線の旅（勿論アルプスの山々）をするのに、都心から出かけるよりは交通費が安くてすむこと（これはチョイとみみっちい話だが）。

とにかく、ゴミゴミした都会の汚い空気が性にあわない。多少は不便であっても、緑が萌え風そよぎ、月は明るく星はにぎやか、鳥は啼き蝶が舞い、朝日が楽しく夕日がもの寂しい、花が咲けば心浮かれ雨が降れば物思いにふけり……。

一日のうち我が家で過ごす時間は僅か十時間にすぎないが、その僅かな時間を性にあうような環境で過ごせれば文句はない。そう思っているから、この町が捨てられないのだ。

### 第三章 自然と人生

大都会に住む私たちは現在、科学の粋を集めたような超文化的な環境の中で暮らしている。

朝、目覚まし時計が目覚ましてくれるか又はタイムスイッチがテレビのスイッチを入れてくれて、その音で目が覚めるだろう。おふくろや愛妻の掛け声で目を覚ます人の場合はともかくとして、とにかく鳥のさえずりで朝を知るなど言う古風な暮らしをしている人はまずいないだろう。

最新のニュースが新聞やテレビを通して目に入って来る朝の膳。トースターがパンを焼き、手頃な焼け具合になるとポンと飛び出す。

そそくさと朝食を済ませて、電車に乗る。50キロの物理的な距離を一時間余で運んでくれる。50キロと言えば、昔の人が一日がかりで歩いた距離である。私たちはもうそんな前のことも考えることもなく、ただ当たり前のように電車に頼って運んでもらっている。

会社のビルディングは冷暖房完備で、いつでも変わらぬ環境を作ってくれる。建物の中にいる限り団扇など使う人はいない。

等々探し出したらきりが無い程に、昔とは変わった便利な暮らしがある。世の中には「昔はよかった」と言って現代を嘆く人もいるらしい。しかしながら、そう言っている人も結局は現代の便利さに頼っている。

私とてこの現代に生きる人間の一人として、けっこう有りがたく暮らしている。だが、どことなく物足りない気がしないでもない。

春はあけぼの・・・ 夏はよる・・・ 秋は夕暮れ・・・ 冬はつとめて・・・

清少納言は枕草子の中でこう書いているが、もし人間の生活が今よりいっそう科学的になってきたら、私たちの生活の中から四季折々の季節感を感じさせるものは段々減っていくに違いない。

日本という国は、たまたま地球のこういう立地条件の場所になったためだろうが、一年を通じて四回の季節の変化が見られる。

春、花。夏、太陽。秋、枯れ葉。冬、雪。だが、こういう自然現象の変化に心動かされる機会が確かに少なくなっている。

「人間生まれ落ちて母を知り、やがて父を知り、自然界を知り、自分を知る。そして他を知り、人間を知

る」フランスの哲学者でこう言った人がいる。彼の言を借りるなら、世の中で「人間にとって自然界は大変重要なものである」と言える。

そんな自然界との接触が少なくなっていく後の人間の生活の潤いは一体どんなところにあるのだろうか。晴耕雨読という言葉があるが、晴遊雨眠となってしまうのだろうか。

「母の恩は海よりも深く、父の恩は山よりも高い」と言う言葉などどうになってしまうのだろうか。

前に述べたフランスの哲学者は、「人間にとって自然界は環境として重要な存在」としているが、不思議なことに、実際にはそんなことは意識しないで生きていける。しかし、都会のアスファルトジャングルとかメカニズムとか言われる中で暮らしている人々のなかには、自然界との接触がなくては精神面での充実した生活が得られないとする人も少なくない。

そういう人たちの中には、自らの再生を求めて旅をすることでそれを慰めようとする人もいる。

かく言う私もその一人で、ただただ純情に花を思い、空を思い、草木に語りかけ、山を歩き続けてもう十年目になる。青春時代とも、青年時代とも言うこの十年を、山を歩くことだけを支えに生きてきたと言ってもオーバーではない。

だから、ある人に言わせれば「ある種の変わり者」かもしれない。それは認めることにしている。

こんな私をつかまえて、人はよくこんなことを問うてくる。

「なぜ山に登るの？」

マロリーという著名な登山家は「そこに山があるから」とあっさり言ってのけたそうだが、私にはこんな洒脱でしかも完璧なセリフは出てこない。未だに自分でもよくわからない。だから私はこう答えることにしている。

「なぜ山に登るの？」

「それが知りたくて山に登っているんだ」

#### 第四章 初めての山歩き

「初めての山歩き」という表現はいささかきざな表現かもしれないが、私のそれは・・・・・・

私はその頃牛込に住んでいた。高校時代にアルバイトで牛込郵便局に通っていた時のことだった。局内のメンバーで構成されている「S山岳会」という存在を知った。この会の中心となって動いているのがNさんという人だった。S山岳会では、毎年四月にオープン・ハイキング会を開くという。どことなく魅かれる所のある大先輩のNさん誘いで、そのハイキング会に連れて行ってもらうことになった。

これが私にとって「山へ行く」ことの始まりとなった。

この時に行った所は、奥多摩の御岳山。ガスに煙るケーブルカーの軌道、霧雨の中で食べた昼飯、今となってはこれ以上のことは覚えていない。何年ぶりかで食べたオフクロの握り飯と顔を流れる汗が口元にしょっぱかったこと・・・・・・。NさんとBさんは郵便の配達、Uさんは電報の配達、TさんとCさんは仕分け、皆変則勤務の多い郵便局員。朝早くから夜遅くまで、そしてたまには夜勤もあるという厳しい生活の中で好きな山歩きを続けている。

この経験以外にも私を山に行かせる環境があった。その頃私の一家は牛込の三軒長屋に住んでいたが・・・・。同じ三軒長屋の中に、近所のO社に勤めるAさんがいた。郵便局のNさんよりさらに山が好きな感じの人で、日曜日といえば必ずと言って良い位に山へ出かけていた。Aさんは岩登りをやっていたらしく、主に谷川岳、奥穂高岳へ出かけていたようだった。

三畳の彼の部屋は土用の午後には大にぎわいになる。太いザイル、ハーケン、ハンマー、カラビナといった登攀用具の間で食糧の準備をする。そして鴨居の上に目をやると、ゴツゴツとした岩山のスケッチが数枚。

そして、私にとって影響力があったもうひとつの環境は、学校だった。クラスにたった一人だけ山岳部に属するHがいた。今になって振り返って見ると、彼の胸の中にはすでにこの頃に「山を一生の友とする」という考えが浸透していたように思う。

初めての山から二か月程して、Hの誘いで奥多摩の秋川溪谷に近い刈寄山（かりよせやま）へ出かけることになった。これが私にとって二度目の山歩きで、Hとの初めての山歩きでもあった。

この頃は五日市線には蒸気機関車が堂々と走っていた。拝島で乗り換えると、二、三両編成のしかも貨客混合編成の列車が、春の麦畑に煙まで影を映して、実に牧歌的だった。

刈寄山は五日市駅から数キロ離れた秋川の流れの南に座す海拔 1,000m 足らずの低山。秋川の支流の盆堀川を囲むように立つ刈寄山・臼杵山・市道山は戸倉三山と呼ばれている。

初めての山登りの時にはGパンとバスケットシューズだったが、この時にはアルバイトで稼いだ小遣いで買ったキャラバンシューズ。さして疲れたでもなく、さして美しい景色を見たでもないし、またさしたる興奮も感激もした覚えはない。しかし、今振り返ると懐かしく、色々思い出されてくる。

その日と、初めての山登りを体験したばかりの私、そして好奇心の強い何人かの級友たち。一人、二人、三人・・・知らぬ間に奥多摩あたりへ出かけるメンバーができてきた。皆乏しい小遣いの中から、アルバイトをしたりしながらサブザック・キャラバンシューズ・帽子・・・と道具をそろえ、山岳部にも負けないハイカーのクラスと化した。実に、「知らぬ間に」という表現がピッタリするような17才の春だった。

何が楽しくて、何を求めて山歩きが始まったのだろうか。未だに思い出そうとしてもわからないが、こんな経験をスタートとして二、三カ月に一度は山へ出かけるようになってしまった。

ひとつは、学校の中に同じようなメンバーがいたことにもよるだろうが、それよりももっと強いものは、やはり少年らしい好奇心と幼年時代への憧れ、すなわち「富士思慕」だったのかもしれない。

以上